

たもずな中だつてな數倍悲あな嬉君
の考らにとたがなでしはいしの御徳には
にへ後ぬ夫思事あらもんすく事さも名譽
。て世夫とつをんもに御徳には
の婦別てきな方に胸にだもと思譽
年一仲れ居へ田住にてもいふせきつも
月蓮とくま並に駢みに分あにな
を托とは思にしほ落れ居たづちたつて居りま過ぎの
過生思ひにしほ落れ居たづちたつて居りま過ぎの
しのひながれぶ都まら思ひも人一に
て頼もけたれを捨ぬ身ひで類蔭ひで
來みま寄れ生運て捨ぬ身ひで類蔭ひで
ましまでらば存命居て身ひで類蔭ひで

斯く耳に近き程 容易に消息の
聞けるやうなところ、どうして此儘住
んで居りながら、どうして此儘住
てしまふのでせう。泣面をする。

こそ頼みはべりしか。いかなれば、斯く耳に近き程ながら、斯くて別れぬらむ」といひつづけて、いとあはれにうちひそみ給ふ。
御方明石上もいみじく泣きて、
明石上「人我身の將來の榮華も望みませぬにすぐれむ行先の事も覚えずや。數ならぬ身には、何事もけざやかにかひあるべきにもあらぬものから、あはれなる有様に、覺束消息も分らないまゝになくてやみなむのみこそ口惜しけれ。
よろづの事何事も入道の御爲と存じますのに其儘引籠つておしまひになつたら、さるべき人の御爲とこそ覺え侍れ。
さて絶え籠り給ひなば、世の中も定めなきに、やがて消え給ひなば、かひなくなむ」とて、夜もすがら、あはれなる事どもをいひ・
いひ・あかし給ふ。
明石上「昨日も、おとどどの君の、あなたにあ
りと見あき給ひてしを、俄に這尼君の所に来て居る事ひ隠れたらむもかるぐしきやうなるべし。身一つは、何ばかりも思ひ憚り侍らず。斯く添ひ給ふ御爲などのいとほしきになむ、心にまかせて身をももてなしにくかるべき」とて、曉明石上が南の對へ歸る事になさつたに歸りわたり給ひぬ。
尼若宮はいかがおはします。いかでか見奉るべき」とても泣きぬ。
明石上今見奉是非お目に懸りたい

くはかなき夢に頼みをかけて、心高く物し給ふなりけりと、か
つぐ思ひ合せ給ふ。尼君久しくためらひて、涙を抑へて尼君明石上に對していふの御徳には、嬉しくおもだたしき事をも、身に餘りて並びなく思ひ侍り。あ
はれにいぶせき思ひもすぐれてこそ侍・・・れ。數ならぬ方にて
も、ながらへし都を捨てて、播磨かしこに沈み居しだに、世の人
に違ひたる宿世にもあるかなと思ひはべりしかど、生ける世に
行き離れ、隔たるべき中の契りとは思ひかけず、同じ蓮に住む
べき後の世の頼みをさへかけて、年月を過ぐし來て、俄に斯く
覺えぬ御事いで來て、へ取られるといふやうな意外な事が突然起つて私も歸京致しました背きにし世に立ち返りて侍る。若宮御誕生の事かひある
御事を見奉り悦ぶものから、片つ方には、覺束なく悲しき事の
打添ひて絶えぬを、遂に斯くあひ見入道と再會の機もなくず隔てながら、この世を別
れぬるなむ口惜しく覺え侍る。世に經し時だに、人に似ぬ心ば
へにより、世をもてひがむるやうなりしを、入道と尼君と若きどち頼みなら
ひて、おのくは又なく契りあきてければ、かたみにいと深く

さればこそさまぐ それだか
ら悲しみも喜びもそれぐ他にか
類のない運命なのです。 ぐ

御息所は明石女御は容易にお暇の出ないのに懲りて、かういふ機會にもう暫く里に居りたくて召す。皇子をお生みになつたく方を御息所と申す。

斯くためらひがたく「かく」は「宮より疾く参り給ふべき云々」を指していふ。こんなに御催促があつて、じつともして居られがない(いそがしい)御身だから、よ此の際養生して参内なさるがよからう。

いなぬ事まれ臨前存何
°筆ともだる終にて事
蹟存お正身の私處をも
でじ耳念で折が理も
すまにでもに死し
がし入居ご必に得萬
てれりざずでる事
こてまいしもやをあ
れ見おすまも致うあ
も苦か間せおしにな
御しねにん目まなた
覽いば些かにすらの
下下な細ら懸れれ御
き手らならばる一
り世目り思
故はににふ
今無か中宮さまに
お常け宮目に
目なずにおか
にもにおかな
かのおなりひ果て
けでくべきなさ
ますか。らでる
氣す迄思
ががはひ
かお通

このうちの事どもは　この願文
に書いてある願解きは果して下
届かばかりと　あなたの將來も見
届けた事ですから。

え給ふを、おとどは、「かやうに面瘦せて見え奉り給はむも、な
かくあはれなるべきわざなり」など宣ふ。對の上などの渡り
給ひぬる夕つがた、しめやかなるに、御方、お前に参り給ひて、
この文箱聞え知らせ給ふ。明石上「思ふさまにかなひ果てさせ給ふ
までは、取隠して置きて侍るべけれど、世の中定めがたければ、
うしろめたさになむ。何事とも、御心とおぼし數まへざらむこ
なた、ともかくもはかなくなり侍りなば、必ずしも今はの閉ぢ
めを御覽ぜらるべき身にも侍らねば、なほ現心失せず侍る世に
なむ、はかなき事をも聞えさせおくべく侍りけると、思ひ侍り
て、むつかしく怪しき跡なれど、これも御覽ぜよ。この御ぐわ
んもんは、近き御厨子などに置かせ給ひて、必ずさるべからむ
折に御覽じて、このうちの事どもはせさせ給へ。疎き人にはな
漏らさせ給ひそ。かばかりと見奉りおきつれば、みづからも、
世を背きはべりなむと思う給へなりゆけば、よろづ心のどかに
え同情を引くもので
て同情を引くもので
入道からの状箱
この文箱を
姫君のお側に
紫上などが自分の御殿に歸られた夕方
明石上
春宮に
氣ぜはしく思はれます
源氏
却つ

り給ひてむ。女御の君も、いとあはれになむ思し出でつつ聞えさせ給ふめる。院も、事のついでに・・・『もし世の中思ふやうならば、ゆゆしきかねごとなれど、尼君その程までながらへ給はなむ』と宣ふめりき。源氏尼君尼君がにあほす事にかあらむ」と宣へば、又うちゑみて、尼源氏は或は若宮の御即位を考へて仰しやるのかの意いでや、さればこそさまゝためしなき宿世にこそ侍れ」とて喜ぶ。この文箱は持たせてまうのぼり給ひぬ。宮より疾く參り給ふべき由のみあれば、紫入道からの状箱は明石上が携へて姫君の所へ参られた斯くあほしたる、ことわりなり。珍らしき事さへ添ひて、いかに心もとなくあほさるらむ」と紫の上も宣ひて、若宮忍びて參らせ奉らむの御心遣ひし給ふ。御息所は、御暇春宮の御方への心やすからぬに懲り給ひて、斯かるついでに、暫しあらまほしくあほしたる。程年ゆかないのにお産といふ怖ろしいなき御身に、さる怖ろしき事をし給へれば、すこし面瘦せほそりて、いみじくなまめかしき御さまし給へり。明石上「斯くためらひがたくおはする程、つくろひ給ひてこそは」など、御方明石上などは心苦しがり聞

も覺え侍らず。對の上紫上_{の御恩を}の御心、あろかに思ひ聞えさせ給ふな。
いとありがたくものし給ふ深き御氣色を見侍れば、身にはこよ

今はるこ初任ら酌なまればせ、せたに程世申あねに全とま間しなばお御身にく思で並てたな附安つにおののら添心ては考い事ぬ申致居親へたは身し私はしり切ての一分ては居しままに居で切な居もとしあしりす紫のるるしたたまが上でのく下し、にすも

斯娘ふるてのくく睦まじかるべき明石上は
前に於ても始終畏筈の體でつ實はての
お前まじくあるべき明石上はてのくく
無闇に遠慮が始終畏筈の體でつ實はての
娘ス娘ふるてのくく睦まじかるべき明石上は
る。てのくく睦まじかるべき明石上はてのくく
深書黃たの言ここの文の言葉
くいばやいははいいものに堅苦
薰てんぼなあだ厚、陸奥紙あるし入道の
きしきがぼばなあだ厚、陆奥紙あるし入道の
めがぼばなあだ厚、陆奥紙あるし入道の
て書きた紙あるし入道の
いすいのが、な手
てがの古、な手
ある香五くそつ手
るだ六なれか紙
。け枚つをしの
はにてまみ文

も覺え侍らず。對の上^{紫上}の御心、おろかに思ひ聞えさせ給ふな。
いとありがたくものし給ふ深き御氣色を見侍れば、身にはこよ
なくまさりて、長き御世にもあらなむとぞ思ひ侍る。もとより
御身に添ひ聞えさせむにつけても、つつましき身の程に侍れば、
譲り聞えそめ侍りにしを、いと斯うしも物し給はじとなむ年頃
はなほ世の常に思う給へ渡り侍りつる。今は來^さし方行く先、う
しろやすく思ひなりにて侍り」など、いと多く聞え給ふ。涙ぐ
みて聞きあはす。斯く睦^{實の母子故}まじかるべきあ前にも、常に打解けぬ
さまし給ひて、わりなく物づつみし・たるさまなり。この文の
言葉いとうたてこはく憎げなるさまを、陸奥紙にて、年經にけ
れば、黄ばみ厚肥えたる五六枚に、さすがに香にいと深くしみ
たるに書き給へり。いとあはれとおぼして、御額髪のやうく
濡れゆく御そば目、あてになまめかし。

源氏は女三宮の所に居られたが 横顔 姫君は心を動かされて

院は姫宮の御方にあはしけるを、中の御障子よりふと渡り給へ 明石女御の方に

入道の文箱を
れば、えしも引隠さで、御几帳をすこし引寄せて、みづからは、
凡帳に半はかくれられた
はた隠れ給へり。源「若宮は驚き給へりや。時の間も戀しきわざ
なりけり」と聞え給へば、御息所はいらへも聞え給はねば、御
方、「對に渡し聞え給ひつ」と聞え給ふ。源「いと怪しや。あなた
にこの宮をらうじ奉りて、懷を更に放たずもてあつかひ・・・、
人やりならず衣も皆濡らして、脱ぎかへがちなめる。かるく
しく、など斯く渡し奉り給ふ。此方に渡り・・・てこそ見奉り給
はめ」と宣へば、明石上「いとうたて思ひぐまなき御事かな。女に
様でもおはしまさむ・だに、あなたにて見奉り給はむこそよく侍らめ。
まして男は、限りなしと聞えさされど、心やすく覚え給ふを、
たはぶれにても、かやうに隔てがましき事なさかし・がり聞え
させ給ひそ」と聞え給ふ。打笑ひて、源「御中どもにまかせて、
見放ち聞ゆべきななりな。隔てて今は誰もくさし放ち、さか
しらなど宣ふこそ」といはれた詞を受けていふ。

心恥かしげなる 氣づまりを感じず。程取りすました様子をし
ありつる箱も、さつきの文箱も慌てて隠すのも見苦しいから其
儘にしてある。それはどうした箱でなぞの箱ぞ。それはどうした箱

今めかしく 若返りなさつたら
譯います。御心持が御冗談を時々仰しから
ものあはれなりける 明石上が何か沈みこんでゐる様子が目立つて見え
る。内かの明石の岩屋から、内々行つて居つた御祈禱の卷數
やまだ果さて居つた御願いなどのありま
したのを、源氏にもお知らせ申
上げる機会があつたらお目にしか
けでおく方がよからうと申します

封 付。書度誦がて願主の依頼によつて讀誦
數した經文や陀羅尼等の名目や度誦
付。書度誦がて願主に送り届ける書度誦
付。書度誦がてお開けになる機會ではござ
ります。いつてゐるやうだ

れなくいひおとし給ふめりかし」とて、御几帳を引きやり給へ
れば、母屋の柱に寄りかかりて、いと清げに、心恥かしげなる
さまして物し給ふ。ありつる箱も、惑ひ隠さむもさまあしけれ
ば、さておはするを、「なぞの箱ぞ。深き心あらむ。懸想人の
長歌よみてふんじこめたる心地こそすれ」と宣へば、明石上
うたてや。今めかしくなり返らせ給ふめる御心ならひに、聞き
知らぬやうなる御すさびごとどもこそ時々出でくれ」とて、ほ
ほゑみ給へれど、ものあはれなりける御氣色どもしるければ、
怪しうちかたぶき給へるさまなれば、煩はしくて、明石上かの
明石の岩屋より、忍びてはべりし御祈りの卷數、又まだしき願
などの侍りけるを、「御心にも知らせ奉るべき折あらば御覽じよ
くべきや」とて侍るを、「只今は、ついでなくて何かはあけさせ
給はむ」と聞え給ふに、げにあはれなるべき有様ぞかしとあ
はれなき事の想像しての詞して、源いかに行ひまして住み給ひにたらむ。命長くて、ここ
はあらぬ事だらう

世の中によしある。奥ゆかしい方々の人とは見る方々の人にいふのは、現世に執着してゐる間に迷ひが深いために、それが智もないふ點は認められるが、才智がない。聖はあつて入道にはかなはない。
さも至り深く いかにも悟つてはゐるが、而も風情のあつた人で聖だち。聖者ぶつたり俗界を離れたやうな顔はしなかつたもの住してゐるやうに見えた。世に住すね。身分などと逢つて見たいのだ。

年の積りに 年を取つて何かと入道の人生柄が妙に戀しく思ひ出されるから、まして夫婦の間では、どんなに感慨も深からう。

の年比勤むる罪もこよなからむかし。世の中によしあるさ
らの年比勤むる罪もこよなからむかし。世の中によしあるさ
き方々の人とて見るにも、この世にそみたる程の濁り深きに
やあらむ、かしこき方こそあれ、いと限りありつつ及ばざりけ
りや。さも至り深く、さすがに氣色ありし人の有様かな。聖だ
ちこの世離れがほにもあらぬものから、下の心は、皆あらぬ世
に通ひ住みわたるとこそ見えしか。まして今は心苦しきほどし
もなく、思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば、忍びてい
と逢はまほしくこそ」と宣ふ。明石上「今はかの侍りし所をも捨て
て、鳥の音聞えぬ山にとなむ聞き侍る」と聞ゆれば、「さらば
その遺言ななりな。消息は通はし給ふや。尼君いかに思ひ給ふ
らむ。親子の中よりも、又ざるさまの契りは殊にこそ添ふべけ
れ」とて、うち涙ぐみ給へり。源「年の積りに、世の中の有様を、
とかく思ひ知りゆくままに、怪しく戀しく思ひ出でらるる人の
御有様なれば、深き契りの中らひは、いかにあはれならむ」な

くそ因姫事け非しを怪のべかあ女のあた心祖か術る事いない
てれ縁君だし難に妙し勤きらな子だつのをののに笞や文と
心でのとかし理にく行で、たの。てだ盡大先乏の立うだしこ
配もあ生思ら想ひひのな全が方。がし臣祖し人派だ。こ
し將つれつぬ又ばねが功いくかにそてはのかなにだ。こ
て來たたて行入かくくのそ朝人おつの物。まく
居のの時ゐ動道りれでこ孫し女爲の廷にとたで知筆だ
つ事だにたを自高てしせれがて系に間にすどのはでがと
たはとこ。假身い何くうもな居では子に奉ぐす。只てもし大變
の何分れ併初で人と孫何公れす。しかした入道處許其て他の
だもつもしにもだい明道とれあるのが、絶失て稀道のれ萬な派
。分た前其も自とふ石多いのが、え態居な眞先

ど宣ふついでに、この夢語りもあほし合する事もやと思ひて、
明石上^{はお目のとまる事もあるかと存じまして}いと怪しき梵字^{ぼんじ}とかいふやうなる跡にはべまれど、御覽^{この中には或}じ
とどむべき節もやまじり侍るとてなむ。今はとて別れ^{（侍り）}・・にし
かども、なほこそあはれは残り侍るものなりけれ」とて、さま
よくうち泣き給ふ。^{文箱を}取り給ひて、源^{筆蹟を見ての詞}いとかしこく。なほほれば
れしからずこそあるべけれ。手なども、すべて何事も、わざと
有職にしつべかりける人の、只この世經る方の心あきてこそす
くなかりけれ。『かの先祖^{せんぞ}のあとどは、いとかしこくありがたき
志を盡して、おほやけに仕うまつり給ひける程に、物の違目あ
りて、その報いに、斯く末はなきなり』など人いふめりしを、
女子^{をんなご}の方につけたれど、斯くていと嗣^{つぎ}なしといふべきにはあら
ぬも、そちらの行ひのしるしにこそはあらめ』など、涙^{源氏のさま}おしの
ごひ給ひつつ、この夢^{夢の事を書いてある箇處に}のわたりに目とどめ給ふ。怪しくひがひ
がしく、すずろに高き志ありと人も咎め、又我ながらも、さる

さこそはうはべには
もとよりさるべき中
ではの弟親もとよ
す。の同の情親をし
るべき夫婦のもと
召で昔今は斯く古へ
すが、縁話は上の分
もうこんなつたに思
願ぬ一つ添へてお目に
これは又具してあります。
こはみじきを當つて居つたのも、畢
て斯かる頼みを設ける爲であつた事。
入道が瑞夢を信じ
て居つた事。

でありながら明石上と契つた事を反省するのである
まじき振舞をかりにてもするかなと思ひし事は、この君の生れ
給ひし時に、因縁が深いと分つたが 契り深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあな
たの事は、覺束なくこそ思ひわたりつれ、さらば斯かる頼みあ
りて、無理にも誓にと望んだのだ 強ちには望みしなりけり、横さまにいみじき目を見、漂
ひしも、この人一人の爲にこそありけれ、いかなる願願文には をか心に
起しけむ、とゆかしければ、それが知りたかったので 心のうちに拜みて取り給ひつ。源氏は この
れは又具して奉るべきもの侍り。今又聞え知らせ侍らむ」と女源文を
御には聞え給ふ。そのついでに、以下明石女御に申す詞 今は斯く古への事をもたど
り知り給ひぬれど、あなたの御心ばへを、おろかにおぼしなす
な。もとよりさるべき中なか、えさらぬ睦のつびきならぬ親睦の間柄 びよりも、横さまの・・
なげのあはれをもかけ、一言の心寄せあるは、おぼろげの事に
もあらず・・。まして此處になどさぶらひ馴れ給ふを見るく
も、初めの志變らず、深く懇に思ひ聞えたるを、古への世のた
とへにも、『さこそはうはべにははぐくみげなれ』と、らうく
深く懇な志をあなたに寄せて居ります
昔の例を見ても

ど深ば怪てになほあやまりても
うく我ゐ對して内心は邪慳
しな繼にてしもも、
てつ母もも繼さうとは邪慳
憎ても今母を慕つとは繼
めようこんとは氣な繼
となはよ對づ心母に反て氣な繼
。に反て氣な繼
が子愛ならず持自分
が情らにつ分

したがふ節々も相手と仲違ひは
しても。さしてもあるまじき何でもない、い
の無事にかどを立てて難癖をつける心のある
は愛相に人を疎外する心のある
融和しにくくて。程と心か
いらねどにが、
多くはあらねど
いいきを見ますにが、
して、それ／＼萬
度の才覺はある
やう更で味々か
でで性を人経験
す。なほ初の心か

又取立てて、又特に自分の妻に
するといつて眞面目に選擇しようと。

かたへの人は達の値打が想像出来る。紫上以外の婦人
宣はそこには君上分のとつてゐるからしきりであります。
世仲よくなされることは少しが、物が
上でのね話をし始める。あなたは少しでもな
く紫上での御どり始終切仰てて、心を合せて姫
お嘆はしやさい。お嘆き致くまでもな
てつてもな

の論れのはくい仕そなをり只ざ蔭るにに數し傍つ御覽じ知る
で相者場かのか切れた心でこいでの取もなく痛けらしきま。下で關心
す手が合なでらつもにもおのまぼでつせらしきま。下で關心
。の仲でき、て又任と世御有様を。もざ外に身下で關心
人間も事私萬親取せな話有様を。出い聞居のさ
まに、にも事顔持てくする事。さ
で入物て安がにちある思る事。恐を意に介する。目を
辛るのも心穩振てる事。いと分でか舞のての姫
目、ら一嬉にひあで、出君に當ぬ寸し體ななせ萬來を
あ人ひしいよきたう事な附ふはねた。くらが。をいき
も勿く事ゆな取あのき

又あまりひたたけて頼もしげなきも、いと口惜しや」とばかり宣ふに、かたへの人は思ひやられぬかし。源明石上をさしていふ「そこそこそすこし物の心得て物し給ふめるを、いとよく睦びかはして、この御後見をも、同じ心にて物し給へ」など、忍びやかに宣ふ。明石上「宣はせねど、いとありがたき御氣色を見奉るまことに、明暮のことぐさに聞え侍る。私をけしからぬ女たなどと紫上が許して下さらないならばこれ程までに私を心にかけては下さるめざましきものになどあほし許さざらむに、明石上「宣はまにまで御覽じ知るべきにもあらぬを、傍痛きまで數まへ宣はずれば、却りてはまばゆくさへなむ。明石上自分の事數ならぬ身の、さすがに消えぬは、世の聞耳もいと苦しくつましましく思う給へらるるを、罪なきさまにもて隠され奉りつつのみこそ」と聞え給へば、源明石上「そのはあなたに好意を持つて居られるのではない」の御爲には、何の志かはあらむ。只この御有様を、打添ひてもえ見(え)・奉らぬ覺束なさに、譲り聞えらるるなめり。それも又取持ちて掲焉(けちえん)になどあらぬ御もてなしどもに、よろづの事なのめに目やすくなれば、いとなむ思ひなく嬉しき。はかなき事にて

じきたどりあらむも賢きやうなれど、なほあやまりても、わが爲したの心ゆがみたらむ人をさも思ひ寄らず、うらなからむ爲は、引返しあはれに、いかで斯かるにはと、繼子の方では思ひなほる事もあるべし。おぼろげの昔の世のあだならぬ人は、繼母に對して表裏のない者たがふ節々もあれど、その二人のうちの一人が正しい場合には一人々々罪なき時に、仲のもてなほすためしどもあるべかめり。さしもあるまじき事に、かどくしく癖をつけ、邪慳であつては罰が當りさうな氣がして改心する事もあらう愛敬なく人をもて離るる心あるは、いと打解けがたく、思ひがひのないしわざでありませう思ひぐまなきわざになむあるべき。多くはあらねど、人の心の種々相を觀察するに人の心のとあるさまかかる趣を見るに、故由といひ、さまくに口惜しからぬ際の、心ばせあるべかめり。皆おのの得たる方ありて、得意の方面が取柄がないでもないが取る所なくもあらねど、又取立ててわが後見に思ひ、まめくしく選び思はむには、その選に入るべき女はありがたきわざになむ。只誠の心の癖なくよき事は、この對對の上をのみなむ。これをぞ

さりや その通りだ、謙遜して
居つてよかつた。

も、物・心得ずひがくしき人は、たちまじらふにつけて、人(の)
の爲さへからき事ありかし。(て)あなたも紫上もさうした缺點がないやうですから私も安心ですさ・なほし所なく誰も物し給ふめ
れば、心やすくなむ」と宣ふにつけても、以下明石上の中さりやよくこそ卑
下しにけれ、など思ひ續け給ふ。

對へ渡り給ひぬ。明石上^さもいとやんごとなき御志のみまさるめ
るかな。げにはた人^{とはいふものの紫上は人並すぐれてかうも足りない點もなくていらつしやるのだからそれも尤も}より殊に斯くしも具し給へる有様の、こと
と思はれるは結構な事です
わりと見え給へるこそめでたけれ。宮の御方、うはべの御かし
て居つて
づきのみめでたくて、渡り給ふ事も、えなのめならざめるは、
に思はれます
忝きわざなめりかし。同じ筋にはあはれど、いま一際は心苦
しく」と、しりうごち聞え給ふにつけても、わが宿世はいと猛
くぞ覺え給ひける。やんごとなきだに、おぼすさまにもあらざ
める世に、まして立ちまじるべき覺えにしあらねば、すべて今
は恨めしき節もなし。只かの絶え籠りにたる山住を思ひやるの
みぞあはれに覺束なき。尼君もただ福地の園に種蒔きてとやう

が大方の御かしづきに一通りの大將の君は夕霧は女三宮の事お世話をすることにつけて。の間にかそ世氏熱たせ引いで人は構何く花若ない立をさて間表うないと若く見しん間は中だてか人も知外へ事。ややいへの面への方で。さらなきなを不し明暮るてと愉ぬらるもの儀式は。う事一快て暮るが同一快物見着どやかに。かなかなる。源氏は女三宮を制しは律にゐはが同一快物見着どやかに。洒落けるは程おごそ大事にはし世を。して自に思る。じ縉げ思えいひにひなてかに。やかに。改居由考は童始改めたにへれ女終幼さかまなるな幼稚せらかい事どもを遊戯されようと大目嘸故が源に。萬事暢氣に。う居少しも持つとの故、人多に。に調子傍託の身の人に心に。と、屈託の身の人に心に。はに。萬事暢氣に。

なりし一言を打頬みて、後の世を思ひやりつつ眺め居給へり。
大將の君は、この姫宮の御事を、思ひ及ばぬにしもあらざりし
かば、目に近くおはしますを、いとただにも覺えず、大方の御
かしづきにつけて、此方にはさりぬべき折々に參り馴れ、おの
づから御けはひ有様も見聞き給ふに、いと若くおほどき給へる
一筋にて、うへの儀式はいかめしく、世のためしにしつばかり
もてかしづき奉り給へれど、をさく^{女三宮の事}けざやかに物深くは見え
ず。女房なども大人々々しきはすくなく、若やかなるかたち人
の、ひたぶるに打花^{實意のない輕薄な}やぎざればめるはいと多く、數知らぬまで
つどひさぶらひつつ、物思ひなげなる御あたりとはいひながら、^{何の届託もなささうな所だが}
何事ものどやかに心しづめたるは、心のうちのあらはにしも見
えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも、又更に心地
ゆきげに滞りなかるべきにしもうちまじれば、かたへの人に引
かれつつ、同じけはひもてなしになだらかなるを、ただ明暮は

さじうみ 正身。本人。當人。
すこしもてつけ
身をこそ嗜むて
やのに身をこそ嗜むて
かはこそ嗜むて
うなきにとをなるい
奥なくすしをなるい
ゆこがて本を成や
おかと人にゐ領をも成や
忘しなもひらとの程うけ
れくなねれし紫だ完に
に身いくるて上は全な女
など品がれが目は三宮も少
らり位した立靜ならまをろやそたか
いは失にうれなといふ
方しはすなでいい

いはけたる御遊びたはぶれに心入れたる童わらはべの有様など、院は
いと目につかず見給ふ事どもあれど、一つさまに世の中をあほ
し宣はぬ御こほんじやう本性なれば、斯かる方をもまかせて、さこそはあら
まほしからめと御覽じ許しつつ、誠め整へさせ給はず。さうじ
みの御有様ばかりをば、いとよく教へ聞え給ふに、すこしもて
つけ給へり。かやうの事を、大將タマノミの君も、げにこそありがたき
世なりけれ、紫むらさきの御用意氣色の紫上はその心がけといひ態度といひ長年たつた今でさへ人の目に耳に觸れて噂の種をまいた事もなく、こちらの年經ねれど、ともか
くも漏り出で見え聞えたる所なく、靜やかななるを本もととして、さ
すがに心うつくし、人をも消たず、身をもやんごとなく心に
くくもてなし添へ給へる事と、見し面影野分の朝に見た紫上の面影がも忘れがたくのみなむ
思ひ出でられける。わが御北雲居雁の方も、あはれとおぼす方こそ深
けれ、いふかひあり、すぐれたるらうくじさなど、物し給は
ぬ人なり、おだしきものに今はと目馴るるに、心ゆるびて、
雲居雁の事で昔は大分氣を揉んだが

見奉り知るに 霧が見知つては。源氏の様子を夕
おほけなき。女三宮に逢はうな
どいふ不料簡。

しきを、心一つに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御
程を思ふにも、限りなく心殊なる御程に、取り分きたる御氣色
にしもあらず、人目のかざりばかりにこそ、と見奉り知るに、
別段大それた料簡があるのでないが
わざとおほけなき心にしもあらねど、見奉る折ありなむやと、
夕霧の心に
ゆかしく思ひ聞え給ひけり。

衛門のかんの君も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れ給ひし
人なれば、この宮を父御門のかしづきあがめ奉り給ひし御心お
きてなど、委しく見奉りおきて、さまくの御定めありし頃ほ
ひより聞え寄り、院にもめざましとはおぼし宣はせずと聞きし
を、斯くことざまになり給へるは、いと口惜しく胸痛き心地す
れば、なほえ思ひ離れず。その折より語らひつきにける女房の
たよりに、御有様なども聞き傳ふるを、慰めに思ふぞはかなか
りける。「對の上の御けはひには、なほ壓おされ給ひてなむ」と世
の人もまねび傳ふるを聞きては、「忝くとも、さる物は思はせ奉
り」。

小侍從 女三宮の乳母子で柏木
の乳母の姪。
おとどの君 源氏の事。

いの作み興な蹴御て有或別鞠つねも好たに居静
。き法だ始り鞠鞠天才曰錄もたた來むら何やでかなるすまひは
いなりま。あ智一也、蹴鞠者傳云黃帝海「劉向此頃は退屈でかういふ事がなれ
た遊がは文武鞠けり天皇大臣元興二戰國時以練二武士レ作、向もな事からう。何をして暮し共れ
ものでしきと皇逸古鎌寺足の槐年庭聞鹿の木蔭にこの壯觀一々知二
眠が事か大遊は今著入鹿の木蔭にこの壯觀一々知二
氣のの」元前著入鹿の木蔭にこの壯觀一々知二
ざまし蹴鞠は不

らざらまし。げにたぐひなき御身にこそ當らざらめ」と、常に
この小侍従といふ御ちぬしをも言ひ勵まして、世の中定めなき
を、あとどの君、もとより本意ありておぼしあきてたる方に赴
き給はば、とたゆみなく思ひありきけり。
宿願通り出家でもされたら女三宮に取持つて下さいと
・世は無常なもの故源氏が
たえず女三宮の事を心にかけてうろつきまはつてゐた

三月ばかりの空うららかなる日、六條の院に、兵部卿の宮、蟹宮衛門の督など参り給へり。あとど出で給ひて、御物語などし給ふ。
源氏も皆の前に出て來られて
源「静かなるすまひは、この頃こそいとつれぐに紛るる事なかりけれ。あほやけ私に事なしや。何わざしてかは暮すべき」など宣ひて、
夕霧が來たが何處にあるか
源「今朝、大將の物しつるはいづ方にぞ。いとさうざ
うしきを、例の小弓射させて見るべかりけり。好むめる若人ど
もも見えつるを、ねたう出でやしぬる」と問はせ給ふ。「大將の
君は、丑寅の町に、人々あまたして、鞠もてあそばして見給ふ」
と聞召して、
源氏が
花散里の方
源「みだりがはしき事の、さすがに目ざめてかどか
どしきぞかし。いづら、此方に」とて御消息あれば、
夕霧に蹴鞠せよと
參り給へ

物しつる」と宣ふ。夕これかれ侍りつ。此方へまかでむや」と宣ひて、寝殿の東面、桐壺は若宮具し奉りて、參り給ひにし頃なれば、こなたは隠ろへたりけり。遣水などの行きあひはれて、寝殿の東面は・人目に觸れない所であつた。由あるかかりの程を尋ねて立ち出づ。おほきおほいどの君達、この三人皆柏木の兄弟。頭の辨、兵衛の佐、大夫の君など、過ぐしたるもまだかたなりなるも、さまぐに人よりまさりてこのみ物し給ふ。やうく暮れかかるに、風吹かずかしこ日なりと興じて、辨の君も、えしづめず立ちまじれば、あとど、「辨官もえをさめあへざめるを、上達部なりとも、若き衛府司たちは、などか亂れ給はざらむ。かばかりの齢にては、怪しく見過ぐす、口惜しく覺えしわざなり。さるはいときやうぐなりや、この事のさまよ」など宣ふに、大將もかんの君も、皆ありゐて、えならぬ花の蔭に

夕霧 柏木 映の姿は

源氏の方へ 春宮の御方に

源氏の方へ 明石女御 太政大臣の子息達

源氏の方へ 稍年取った人も 又まだ一人前になつた

源氏 行儀をくづす意

私のやうな老人になつては見苦しく傍観してゐるのは殘念です たが蹴鞠の遊びはその様が身分ある者の遊びとしては軽々しいやうに思はれる

をさくさまよく蹴鞠はくもはあなり騒めいがし無作法むさくわかではなだが、それも場所ばじょがらんがらにあつた。斯くはかなき遊戯ゆうぎではあるが、互に巧拙こうせつの技わざを競たがつて我劣おとこりと思つてある中に、い額付がくふである。

り體裁たいさいよくもなし静かしちやうかではなだが、そのものであつた。斯くはかなき遊戯ゆうぎではあるが、互に巧拙こうせつの技わざを競たがつて我劣おとこりと思つてある中に、い額付がくふである。

御階の間みはし 寝殿の南面の階段のある間ま。人々花の上うへも人々花の上うへも人々が花の事ことも忘れ鞠まりに熱中してゐるさまを源氏みなも女三宮も隅の勾欄まで出て眺めてゐられる。

上うへも亂まれて高官の方々かたのみも額がくが少し弛ほんだ。

上うへも亂まれて高官の方々かたのみも額がくが少し弛ほんだ。

ぬ亂れごとなめれど、所がら人ひとがらなりけり。故ある庭の木立の、いたく霞みこめたるに、色々のひもときわたる花の木ども、わづかなる萌黄めいこうの蔭に、斯くはかなき事なれど、よきあしきけちめあるを、挑みつつ、我も劣らじと思ひがほなるなかに、衛門えもんの督しらべの假初はじに立ちまじり給へる足もとに、並ぶ人ひとなかりけり。柏木の様子は僅に芽を出した柳かたちいと清げになまめきたるさましたる人の、用意いたくしてさすがに亂まりがはしき、をかしく見ゆ。御階の間に當れる櫻さくらも宮みやも、隅のかうらんに出でて御覽みはしす。いとらうある心こころばへども見えて、かず多くなりゆくに、上うへも亂まれて、かうぶりの額がくすこしくつろぎたり。大將だいしよの君きみも、御位ごいの程思おもふこそ例たとならぬ亂まりがはしさかなと覺おもゆれ、見る目めは人ひとよりけに若くをかしげにて、櫻の直衣ただぎのややなえたるに、指貫さしあきの裾すそつがた、すこしふくみて、氣色ばかり引きあげ給へり。かるくくしくも見えず。

櫻さくら 櫻製さくらせいは表白めいめいに裏赤花うらあかはな。

中なかのしな 中段の邊に腰こしをおろされた。

櫻さくらはよきて伊行釋いぎやし「吹く風よ心こころしあらばこの春の櫻さくらはよきて散さんらさざらなむ」

例の殊ことに例の如くこんな場合だからとて格別ごべつとりりますでない女房達めいぼうだつがねて、御簾ごらんの外にもふは平安へいあん。然しから切つて袋ふくろの中に入れたるはおき、道々の道祖神みちのたまに奉つた規律立たてたないと御簾ごらんの片端かたばが。女三宮の居られる

心あわただしげ 皆慌てて居て
こわがつてゐる様子に見える。

紅梅 表紅に裏紫。

七七八すんばかりぞ 身のたけに
でに御七八寸程餘つてゐる。衣裳が裾の方
長くある。余つてゐて。小さいから
髪の垂れ下つてゐる。髪の垂れ下つて
髪のかかりたる。髪の垂れ下つて
程てゐる横顔は、何ともいへない
上品にかはいらしい。髪の垂れ下つて
見いと飽かず 残念が出来
らず事出來
見る事飽かず 思來
つてゐる。女三宮をはつきり
つてゐて柏木は物足り

心あわただしげにて、ものあぢしたるけはひどもなり。
几帳の際きは_{奥まつたあたりに}すこし入りたる程に、桂姿うちきにて立ち給うながすへる人あり。階はし_{これが女三宮である。}より西の二の間にの東ひんがしのそばなれば、紛れ所もなく、あらはに見入れらる。紅梅女三宮の衣裳にやあらむ、濃き薄きすぎくに、あまたかさなりたるけちめ花やかに、冊子さふしのつまのやうに見えて、櫻の織物の細長ほそながなるべし。御髪みがしの、裾きしまでけざやかに見ゆるは、糸をよりかけたるやうに磨きて、裾きしのふさやかにそがれたる、いとうつくしげにて、七八すん許りぞ餘り給へる。御ぞの裾きしがちに、いとほそくささやかにて、姿つき、髪かみのかかり給へるそば目、いひ知らずあてにらうたげなり。夕かけなれば、さやかならず、奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。鞠女房達がに身熱中するを投ぐる若君達はつきり見えずの、花の散るを惜しみもあへぬ氣色おもてどもを見るとて、人々あらはを、ふともえ見つけぬなるべし。猫のいたくなけば、見返振返つて御覽りになつた女三宮の顔付や態度

人やと、ふと見えた。大將いと傍痛けれど、這ひ寄らむもな
かくいとかるくしければ、只心を得させて、うちしはぶき
給へるにぞ、やをら引入り給ふ。さるはわが心地にもいと飽か
ぬ心地し給へど、猫の綱ゆるしつれば、心にもあらず打歎かる。
ましてさばかり心をしめたる衛門の督は、胸つ・とふたがりて、
誰ばかりにかはあらむ、ここちらのなかにしるき袴（うちき）姿よりも、人
に紛るべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりて覺ゆ。
さらぬがほにもてなしたれど、まさに目とどめじや、と大將は
いとほしくあほさる。わりなき心地の慰めに、猫をまねきよせ
て、かき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげに打鳴くも、
なつかしく思ひよそへらるるぞすきくしきや。

等圓座で渦状ゑんざともいふ。藁菅藺
椿餅で、子鞠に編ざる。折んでも定座いふ。
葉餅に粉まぶし、包んで、つて饅せあまづせ。
らをかける。菓蹴にんざともいふ。椿の葉餅で、
千物乾魚。

子に圓座召して、わざとなく、椿餅、梨、柑子やうのものども、
さまくに箱の蓋どもに取りませつたるを、若き人々そぼれ
取りくふ。さるべき干物ばかりして御かはらけ参る。衛門の督
は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつ
けて眺めやる。大將は心知りに、怪しかりつる御簾の透影思ひ
出づる事やあらむ、と思ひ給ふ。夕霧が いと端近なりつる有様を、か
つはかるくしと思ふらむかし、いでや此方の御有様の、さは
あるまじかめるものを、と思ふ夕霧の心に
よりは、うちくの御志ぬるきやうにはありけれ、と思ひ合せ
て、なほ内外の用意多からず、いはけなきは、らうたきやうな
れど、うしろめたきやうなりや、と思ひおとさる。宰相の君は、
よろづの罪をもをさくたどられず、覚えぬ物の隙ひまより、ほの
女三宮の姿を見たにつけても自分が以前からこがれてゐた志が達せられるのかと
宮の姿を見たにつけても自分が以前からこがれてゐた志が達せられるのかと
かにもそれと見奉りつるにも、わが昔よりの志のしるしあるべ
きにやと、契り嬉しき心地して、飽かずのみ覺ゆ。院は昔物語
源氏

しいで給ひて、源「おほきあとどの、よろづの事に立ち並びて、
勝負の定めし給ひしなかに、鞠なむえ及ばずなりにし。はかな
き事は、傳へあるまじけれど、物の筋は、なほこよなかりけり。
いと目も及ばず、かしこうこそ見えつれ」と宣へば、うちほほ
ゑみて、柏木「はからくしき方にはぬるく侍る家の風の、さしも吹
き傳へ侍らむに、後の世のため、殊なる事なくこそ侍りぬべけ
れ」と申し給へば、源「いかでか。何事も人に殊なるけぢめをば、
しるし傳ふべきなり。家の傳へなどに、書きとどめ入れたらむ
こそ興はあらめ」など、たはぶれ給ふ御さまの、匂ひやかに清
らなるを見奉るにも、斯かる人にならひて、いかばかりの事に
か心を移す人は物し給はむ、何事につけてか、あはれと見許し
給ふばかりは靡かし聞ゆべき、と思ひめぐらすに、いと・こよ
なく御あたり遙かなるべき身の程も思ひ知らるれば、胸のみふ
たがりてまかで給ひぬ。

斯かる人に三宮はこんなに立派な方を夫にししてゐられるものか。つても他にだ立心を移されるものがあつてゐる事がある。つてなんな事がある。つてなんな事がある。

今日のやうならむ
なな暇の日を見付けて、今日のやう
氏がないうちに又おしいでて、かなさいと源
が仰しゃいましめたから。

大將の君一つ車にて、道の程物語し給ふ。柏木^{夕霧は柏木と同車して}「なほ此頃のつれづれには、この院に参りて紛らはすべきなりけり。『今日のやうならむ暇^{いとま}のひま待ちつけて、花の折過ぐさず参れ』と宣ひつるを、春惜しみがてら、月^{今月中に}のうちに、小弓^{持つて}持たせて参り給へ」と語らひ契る。^{二人は}おのく別るる道の程物語し給うて、宮の御事のなほ言はまほしけれ・、柏木^{朱雀院}院には、なほこの對^{紫上_の居られる東對}にのみ物せさせ給ふなめりな。かの御^{おほむ}・・覺えの殊なるなめりかし。この宮いかにおぼすらむ。御門^届の、並びなくならはし奉り給へるに、さしもあらで、くし給ひにたらむこそ心苦しけれ」と、あいなくいへば、夕^{とんでもない間違です}たいぐしき事。いかでかさはあらむ。こなたは、さまかはりておほし立て給へる睦びの、けぢめばかりにこそあべかめれ。宮をばかたぐにつけて、いとやんごとなく思ひ聞え給へるものを」と語り給へば、柏木^{内々の事情は}いで、あなかま、給へ。皆聞き^{女三宮に氣の毒なやうな場合が}て侍る。いといとほしげなる折々あるをや。さるは世におし

なべたらぬ人の御覺えを。ありがたきわざなりや」といとほし
がる。

よ、と思ふ。
「みやま木に時定むるはこ鳥もいかでか花の色に飽くべき
わりなき事ひたあもむきにのみやは」といらへて、煩はしければ、殊にいはせずなりぬ。他事にいひ紛らはして、おのく別れぬ。

かんの君は、なほおほいどこの東の對に、獨住にてぞ物し給ひける。思ふ心ありて、年頃斯かるすまひをするに、人やりならず、さうぐしく心細き折々あれど、わが身かばかりにて、などか思ふ事かなはざらむ、とのみ心驕り・するに、この夕べよ

夕霧 源氏 女三宮

さういふ無闇な事を一本調子にいふものではない

うるさいから

二人は

柏木 太政大臣

ひんがし

ひとりすみ

身から出た鋗ながら

柏木の心

うけらやはし宮又いでく
は出方よのあか。
いす自違一うおのな
か事然の寸と人をく
ぬも何外し。
°あと出
らかが
うし手
がて輕
、機に作
機會出
自分は見
付か忌人
をとく
ひどく滅
入りこん
るとを「
方もさき三
よそに見
ゆきの諦
いなか
ふし」見
語てはが
を「
點折
出る」
したも
の「繁
である
あ」
うは増す
姿きたす
拜しての
戀なしか
たの歌
「歎き」
くで思で
の思、ひご
今は今を
れもしいひ
まあなま
得がます
ぬらが歎女
めの戀あ
暮戀一や
さし「な
むく見く
ばず今
あもやあ
やあき
ならくす
今日も
やせ古
が人今
に垣見女
が下三御
原げ宮垣
ては遊は
六ばど原
い條さん
つ院れな
分先るし
たのたに
達事て手
奥段深い
伊ま御事
で垣で一
見勢で垣
も物のの
語こと中
は古とを
が人今
に一だ自
け分宮窓
のでがに
が風も深
原に通く
ど内に。す
に。す戀ん
るしな
たにけ達
がる段深
か入のが
り風出る
のせ入ま
に來と取
私し誘よ
う私たは
うふたの
をたはう
ふたの女
がれ。事ら
女

りくしいたく、物思はしくて、いかならむ折に、又さばかりに
ても、ほのかなる御有様をだに見む、ともかくもかき紛れたる
際の人こそ、假初にも、たはやすき物忌方違の移ろひもかるが
ろしきに、おのづから、ともかくも物の隙を窺ひつくるやうも
あれ、など、思ひやる方なく、深き窓の内に、何ばかりの事に
つけてか、斯く深き心ありけりとだに知らせ奉るべき、と胸痛
くいぶせければ、小侍従がり、例の文やり給ひて、柏木文「一日の
風に誘はれて、御垣みかきが原はらを分け入りてはべしに、いとどいかに
見おとし給ひけむ。その夕べより、亂氣分り心地かきくらし、あや
なく今日(は)をながめ暮し侍る」など書きて、

柏木

よそに見て折らぬなげきは繁れども名残戀しき花の夕影

先日柏木が宮を見た事情を知らないから

とあれど、侍従は一日の心ありふれた戀も知らねば、只世の常のながめにこそはと思ふ。女三宮のお前に人繁からぬ程なれば、この文柏木の文を女三宮方にをもて參りて

手紙をよこしなさるのがうるさい

侍従詞「この人の、斯くのみ忘れぬものに言問ひ物し給ふこそ煩は

書らがりふやどなつしつは一従も常注たて大
いな女を意うとかたててあ日は黙よ意ら女將
たか三な味な、つのゐゐなは興りりを、三の
のつ宮きで事女たでままた ざこも咎源宮
でたをるすを三の女ししの先めん め氏を夕
あの見の。仰宮に三たたい達てで女らは見霧
るでたで何しに、宮。がらの。居三れどたが、
。こせとやお見にけ、つ鞠 ことういる目ずおし見しの
こんをのふのにも逢かてや日 な侍意言はかあはら見るに
返從。ひ如からせぬ事は、 事は柏が何つず申と風を
を知木かいたなさ思を知私

しく侍れ。心苦しげなる有様も、見給へあまる心もや添ひ侍ら
むと、みづから心ながら知りがたくなむ」と、打笑ひて聞ゆ
れば、女三^{（いやな事をいふ）}いとうたてある事をもいふかな」と、何心もなげに宣
うて、文廣げたるを御覽す。「見もせぬ」といひたる所を、あ
さましかりし御簾^{（猫の縄で御簾が巻上げられた時の事）}のつまをおぼし合せらるるに、御おもて赤み
て、あとどの、さばかり、事のついでごとに、「大將^{（夕霧大將）}に見え給ふ
な。^{（あなたはねんねだから）}いはけなき御有様なめれば、あのづから取りはづして見奉
るやうもありなむ」と、誠め聞え給ふをおぼし出づるに、大將
の、さる事^{（の）}・ありしと語り聞えたらむ時、いかにあばめ給はむ
と、人の見奉りけむ事をばおぼさで、まづ憚り聞え給ふ心の内
ぞをさなかりける。常よりも御^{（おほき）}・さしいらへなければ、すさ
まじく、強ひて聞ゆべき事にもあらねば、引き忍びて、例の書
く。^{（侍従文）}一日はつれなしがほをなむ。めざましと許し聞えざ
りしを、見ずもあらぬやいかに。あなかけくしや」と、はや

いまさらに 女三宮に御懸想です
さつた所でどうせ叶はね戀想です
もの、今更顔色にもお出しなさす
いますな。「いろ」は櫻の縁語。

と達筆に りかに走り書きて、
「いまさらには侍従 いいろにないでそ山櫻あよばぬ枝に心かけきと
かひなき事を」とあり。

發行所	振替 東京日本橋二九六三九番会社	昭和十三年二月十八日印刷	校對 源氏物語新釋 卷の三
		昭和十三年二月廿二日發行	定價金貳圓八拾錢
發行者	吉澤義則	著者 下中彌三郎	
印刷者	齋藤道太郎	印刷者 東京市日本橋區吳服橋	東京市日本橋區吳服橋

파 4 W - 23







